

日本国一宮

発行所 全国一の宮会
〒633-8538
奈良県桜井市三輪1422
大神神社内(全国一の宮会事務局)
TEL 0744-42-6633
FAX 0744-42-0381
編集 全国一の宮会事務局
第 四 号

【令和四年度 総会概況】

【令和四年度 総会審議事項】

沖縄県にて予定の総会が已む無く中止と成った為、本件は昨年、一昨年同様議案送付形式となり、令和三年度の「会務報告・決算」(監査報告添付) 及令和四年度の「事業計画(案)、予算(案)」の全ての議案は十一月二十日の集計にて原案通り承認となりましたので茲にご報告致します。

尚、四年度は三年に一度の役員改選期でありましたが、総会中止となり主立った事業は事業頒賜品に係わる事務(巡拝達成者への文庫呈上含む)が中心となりますので次回令和五年度総会まで、新木直人会長以下役員には継続して在任することで承認をされております。

【令和三年度 会務報告】

二月に筑後国一之宮高良大社にて前期役員会並九州沖縄地区会員打合会を企画しておりましたが、当時は新型コロナウイルス第六波が猛威を振るっており、中止となりました。開催に当たりご指導ご協力を下さいました竹間宮司様に厚くお礼申し上げます。

尚、この時の協議事項は、事業中間報告で九月に予定していた同地区に於ける総会に関する事であり、役員、地区会員の承認を書面で得て、総会は、琉球国一之宮波上宮にて開催が決定されました。又、本紙面でも掲載の通り只今も行っております事業頒賜品『旅する一の宮』の改訂新版の発刊に取り組んでおり今秋末には完了の予定です。そして今年度は以前よりも行動

今上陛下御製 (令和三年歌会始御題 「実」)

人々の 願ひと努力が 実を結び
平らけき世の 到るを祈る

制限が緩和されたこともあり、巡拝達成記念品「文庫」の申込みが多く事務局に寄せられました。引き続き巡拝達成の方々にお喜びいただける様、各神社に於かれましてもお取り次ぎ宜しくお願い致します。

【令和四年度 業務予定】

令和四年度総会は予て会員関係各位にお知らせの通り、新型コロナウイルス感染症第七波による影響で中止と相成りました。沖縄県祖国復帰五十年を壽ぐ記念総会として賑々しく執り行い度く計画して居りましたが、現地の医療体制の逼迫、そして会員皆様の健康を鑑みての事であり、ご予定の方々には申し分けなく存じましたが、



琉球国一の宮 波上宮

中止決定の趣旨をご理解頂いたことに感謝申し上げます。

本来であれば総会に続く研修会では沖縄県祖国復帰五十年の節目に県戦没者墓苑にて「戦歿者奉慰顕彰祭」を斎行する運びでしたが、此方も已む無く中止となりましたので、会より琉球国一之宮である波上宮神前へ神恩報賽の玉串料を拝送申し上げましたので、茲にご報告致します。

令和四年度の他の予定としては、昨年同様に一之宮巡拝運動を活性化させるべく各種事業品の頒布推進を積極的に展開して参ります。

事務局は一つ一つの事務を丁寧を旨に進めて参る所存ですので変わらぬご指導を願ひ上げます。

次に次回の会合は、令和五年二月中旬以降前期役員会を開催となりますが、「地区、会場神社」については追って会長以下役員関係者へ相談の上ご連絡致します。この役員会では令和五年度総会開催の件を諮りますが、総会は令和元年度東日本地区、三嶋大社以来のこととなりますので会長、副会長をはじめ各地区会員皆様のお考えを役員皆様より賜り方向性を付けられればと考えておりますので、引き続き会務への格別のご教導を宜しくお願い申し上げます。

私感「世相と神職の役割」

副会長 打田 文博



コロナも収まるどころか、次々と進化しています。最近では新たなウイルス感染症も現れ難儀なことで、ワクチンもさることながら、一日も早い治療薬の誕生を心待ちにしています。

さらに、昨今は自然災害が地球的規模で発生しており、日本も地震・洪水・噴火等々異常現象が続き、温暖化が原因の一つのようです。世間では、脱炭素化が叫ばれています。科学者曰く「地球上に動力が生まれてから、地球崩壊へのスピードが一気に増した。足るを知る生活様式を…」と、仰っていました。何となく腑に落ちませんが、この先どこに向かうのか心

配です。

ある日参道を歩いていると、参拝者が私を見るなり慌ててマスクを着けようとする。そこで私は、「マスク無しで神様の恵みをいっぱい吸ってお帰り下さい。」と言う。そして、お互いにつこり笑って別れる。一瞬の出来事ですが、ご社頭ならではの有り難さを感じます。

当社は、静岡県の西部地方に位置し、遠江国一宮として、国内の人々を中心に近頃は県内外からもご参拝を賜り、コロナ禍ではありますが、鎮守の杜を訪れる人々は、然程変わらず、齋庭の力は、今も昔も広大無辺で有難い限りです。

ところで、来年の大河ドラマは、徳川家康が主役のようです。当社の「延宝の記録」によると、元龜三年（一五七二）九月、家康公は神主に命じ御神霊を別所に遷し、願文と三条小鍛冶宗近作の太刀を奉り戦勝を祈願した後、火を放ち全ての社殿を焼失した。その後、

祈願が叶ったことから天正三年（一五七五）家康公は家臣本多重次に命じ、本殿を再造営。同十一年（一五八三）十二月、末社・拝殿・廻廊を造営……とあり、まさに、徳川・武田の戦乱を彷彿させられます。尚、当時の社殿は残念ですが明治十五年に火災により焼失しており、現在の御本殿は大社造りですが再建当時、御祭神のご縁で出雲大社様より図面をお借りし、それぞれ約半分の規模で、明治十九年に復興致しております。

さて、昨今の世情は正に内憂外患、隣国ロシアは西の隣国ウクライナへの侵略戦争を続け、世界的混乱に陥っています。また、独裁国や軍政国家は専制政治に走り、一触即発の危険な状態が各地で散見されます。特に、我国は有事同様の環境にあると言っても過言ではありません。安全保障は、究極の社会インフラです。一刻も早い備えと法整備が必要です。

また、日本社会も、情報化が進みSNS等便利になりました。一

方で新たな問題や犯罪も多発しています。ネット上の無責任な書き込みや印象操作を目的とした偏向報道も含め、情報災害は社会の混乱を招き、形振り構わぬ悪質なやり方は、一層エスカレートし、無秩序を広げます。

安倍元首相を襲った悲劇は断じて許すことが出来ません。犯罪者と旧統一教会の活動などは徹底的に解明し、対策を講ずることは当然ですが、事件の本質と離れ「接点がある」だけで掘り下げようとせず、集団リンチのような空気を作り、意に添わないものは排除する。神社界は無縁といえるでしょうか。

幸い私たちには、事あるごとに唱和する敬神生活の綱領があります。その向かうところは「祭祀の厳修」「祈り」そして、「修理固成」です。拳拳服膺し全国一の宮から一層強力に実践しようではありませんか。

(九月十日記)

(小國神社 宮司)

神功皇后伝承と一の宮

渋谷申博 (日本宗教史研究家)



渋谷申博先生

一、はじめに

一の宮に選ばれている神社の由緒や伝承をみると、神功皇后に関する話を伝えているところが多いことに気づく。もちろん、それらすべてが古代に溯るものではなく、中世以降に語られるようになったものも少なくない。しかし、そのようないわば「後付けの伝承」が生じ

たというのも、その神社が一の宮であったことに由来している面があったことも事実であろう。たとえば、伊藤邦彦氏はいわゆる蒙古襲来以降の一の宮の変質について次のような指摘している。

「モンゴル襲来という軍事的緊張を契機に、弘安七年(一二八四)鎌倉幕府の一宮政策が展開し始める。鎌倉幕府は、守護を統率者として国単位に御家人層を再編するためのイデオロギー的結集核として一宮を位置付け、ここに一宮は再び国家的な意味をもった神社制度として再生し、室町幕府―守護支配

の下における一宮の存在形態、うけ継がれていった」(伊藤邦彦「諸国一の宮制の展開」)

これに関連して藤沢彰氏の鹿島神宮についての次の指摘も重要であろう。

「蒙古襲来を契機に、各寺社は異国降伏に因んだ寺伝・社伝の再編・新生をはかり、当社においても、御軍祭・御船祭の由緒を、神功皇后の三韓出兵説話に結びつけて説明するようになる。管見によれば、神功皇后と鹿島神を結びつける説話は、延慶元年(一一三〇八)〜文保二年(一一三二八)以前に成立したとされる「八幡愚童訓」に載る事

例が早い。鹿島神宮に伝来する縁起では、鎌倉時代末の成立と推定される「鹿島宮社例伝記」が、七月の神事を「三韓降伏」と神功皇后説話に結びつけて説く早い例である」(藤原彰「鹿島神宮の祭儀と空間構成について」)

こうしたことから一の宮に関わる神功皇后伝承は、一の宮制の確立・展開を考える上で重要



常陸国一の宮 鹿島神宮楼門
(水戸藩初代藩主 徳川頼房公造営)

な資料になるものと思われる。そこで小稿では管見に触れた伝承類を列挙することとしたい(本来であれば神功皇后についての基本文献である『古事記』『日本書紀』の記述から始めるべきであるが、紙幅の関係から割愛した)。

『古事記』『日本書紀』に続くものとしては『続日本紀』天平九年四月一日条の「夏四月乙巳。遣使於伊勢神宮。大神社。筑紫住吉。八幡二社。及香椎宮。奉幣以告新羅无礼之状」が重要である。ここにあげられている5社のうち伊勢神宮・大神神社を除く3社が神功皇后関係の神社であり、海外とくに新羅に対し神威を示す社と信じられていたことがわかるからだ。また、大神神社・筑紫野国住吉神社・

宇佐神宮(八幡二社)がのちに一の宮となつていふことも注目される。

二、「風土記」の一の宮関連
神功皇后伝承

『古事記』『日本書紀』『続日本紀』に次いで重要な文献は、和銅六年(七一三)の元明天皇の詔によつて編纂された各国の「風土記」であろう。中でも『撰津国風土記』逸文は、記紀に記された住吉大社創建の由緒に関わるものとして重要である。また、神功皇后を「息長帯比売の天皇」と呼んでいることも注目される。同じく『撰津国風土記』の逸文で、『本朝神社考』に引用された部分は、氣比神宮の創建に関わる異説といえる。これ

とほぼ同内容の文言が『越前国風土記』逸文にもある。

播磨国は神功皇后伝承の舞台となつた土地の一つで、『播磨国風土記』には皇后の船を守つた伊太代いだての神など記紀にはない伝承が収録されているが、伊和神社と皇后に関する記述はない。

その一方で紀伊国の丹生都比売神社に関わるものと思われ、記述が見られる。また、『日向国風土記』逸文には都農神社の祭神と思われる吐乃ノ大明神が登場する。

○『撰津国風土記』逸文(『日本紀』卷六)

撰津国の風土記に曰ふ。住吉と称いふ所以は、昔、息長帯比売の天皇の世、住吉の大神現れ出でて、天の下を巡行めぐり、住むべき国を覓まぐ。時に、沼名掠ぬなぐらの長

岡の前さき(前は今の神の宮の南の辺、是れ其の地とこ)に到り、乃ち謂はく「斯は実に住むべき国」といふ。遂に讚ほめ称へ「真住ますみ吉し、住吉国」と云ふ。仍すなはち神の社を定む。今の俗よ、略はぶき、直ただに須美すみのえ乃のと称ふ。

○『撰津国風土記』逸文(『本朝神社考』二)

風土記。人皇十四代仲哀天皇、三韓を攻めむとす。筑紫に到り



撰津国一の宮 住吉大社(正面鳥居より国宝本殿を拝す)

て崩る。今、氣比の大明神は此の帝なり。其の後神功は、開化天皇の五世の孫、息長宿祢の女なり。是に軍を発し、三韓を伐つ。時に産月に当る。石

を取り、其の腰裳に挿み、産まざらむとするなり。遂に新羅・高麗・百済に入り、皆悉く

臣服ふ。筑紫に帰り到り、皇子を産む。是、誉田の天皇なり。皇后、摂津国の海浜の北岸の広

田郷に到る。今、広田明神と号くるは是なり。故に其の海辺を

号け、御前の浜と曰ひ、御前の澳と曰ふ。又、其の兵器を埋む

処は武庫と曰ふ。〈今、兵庫と曰ふ。〉其の誉田の天皇は、今

の八幡の大神なり。
○『越前国風土記』逸文（『神名帳頭註』）

風土記に云ふ。氣比の神宮は、

宇佐と同体なり。八幡は応神天皇の垂迹。氣比の明神は仲哀天皇の鎮座なり。

○『播磨国風土記』逸文（『日本紀』卷十一）

播磨国の風土記に曰ふ。息長帯日女命、新羅国を平けむと欲して下り坐しし時、衆神に捧ぎたまひき。爾の時、国堅めまし

し大神のみ子、尔保都比売命、国造石坂比売命に著きて、教へて曰りたまはく、「好く我が前

を治め奉らば、我ここに善き駈を出して、比々良木の八尋杵根

底附かぬ国、越売の眉引きの国、玉匣かがやく国、苦枕宝

有る国、白衾新羅の国を、丹波以ちて平伏け賜はむ」とのり

たまふ。此く教へ賜ひて、ここに赤土を出し賜ひき。その土を天の逆杵に塗りて、神舟の艫舳

に建て、又、御舟の裳と御軍の着衣とを染め、又、海水を攪き濁して、渡り賜ふ時、底潜く

魚、及高飛ぶ鳥等も行き来ふことなく、前に遮ふることなし。かくて、新羅を平伏け已訖へて、

還り上りたまひき。乃ち其の神を紀伊の国管川の藤代の峯に鎮め奉りたまひき。

○『日向国風土記』逸文（『塵袋』第七）

日向国古庚郡ツネニハ児湯郡トカクニ、吐濃峯ト云フミネ

アリ。神オハス。吐乃ノ大明神トゾ申スナル。昔、神功皇后、

新羅ヲウチ給シ時、此ノ神ヲ請ジ給テ、御船ニノセ給テ、船ノ舳ヲ令護給ケルニ、新羅ヲウ

チトリテ販リ給テ後、韃馬ノ峯ト申ス所ニオハシテ、弓射給ヒケル時、土ノ中ヨリ黒キ物ノ頭

サシ出ケルヲ、弓ノハズニテ、ホリ出シ給ヒケレバ、男一人女一人ゾアリケル。其ヲ神人トシテ召シ仕ヒケリ。其ノ子孫今ニ残レリ。是ヲ頭黒ト云フ。

三、中世の伝承

前述のように中世になると

『古事記』『日本書紀』では神功皇后との関連が述べられていなかった神社も、皇后の遠征を守護したといった事績を主張する

ようになる。これは神功皇后信仰の変貌を示すものであると

もに、一の宮をはじめとした神社の信仰の変貌も表わしているといえよう。

こうした変貌の要因の一つとして、「八幡縁起絵巻」の普及があげられる。「八幡縁起絵巻」

には甲類・乙類の二種類があり、甲類は一二六一年～一二六七年頃に成立したと考えられる『八幡宮寺巡拝記』、乙類は十四世紀初頭に成立したと考えられる『八幡愚童訓』に依拠しているとされる。そこでこれらに加えて石清水八幡宮の別当家の別当家の田中宗清が健保二年(一二二四)頃に石清水八幡宮の文書をまとめて作った『宮寺縁事抄』から、一の宮と神功皇后に関する記述の一部を引用する。なお、引用にあたっては筒井大祐「八幡縁起絵巻と『八幡宮寺巡拝記』」を参考にした。

ちなみに『八幡愚童訓』については、吉田修作「異国へ巡行した〈みこともち〉神功皇后」の次の指摘も参考になる。「愚童訓においては、神功皇后の神

憑りは『物狂』と表現され、こ
こでも武内宿祢は、神功皇后
(神)と問答し、神功皇后とと
もに、神の言葉を伝達しながら
移動するという〈巡行するみこ
ともち〉の役割を担っている。

それらに対し、宗像の大明神、
宝満大菩薩、河上大明神、藤大
臣連保(月神、高良大明神)な
ど、九州各地の神社の神が協力
するという展開となる。因みに、
宗像は宗像大社などの宗像三女
神、宝満大菩薩(大明神)は太
宰府の東北の宝満神社の神、河
上大明神は佐賀県大和町川上の
淀姫神社(與止日女神社のこと、
引用者注)の祭神、高良大明神
は久留米市高良大社の祭神であ
る」

○『八幡宮寺巡拝記』三話

豊前国ノフナキ山ノ木ヲ切

テ、宇佐ノ郡ニテ、船ヲツク
ル、鹿島ニテ三百五十七人ノリ
ヌ、大將軍ニハ住吉并ニ高良ノ
大臣、梶取ハ鹿島ノ明神、姓ハ
安曇、名ハキヨマロ也、

○『八幡宮寺巡拝記』三話

此二玉(鎮懐石のこと、引用
者注)ハ河上ノ宮(與止日女神
社のこと、引用者注)ニオサマ
ル、長五寸ハカリ也、カシラハ
二寸ハカリ也、尾ソホソシ。

○『八幡宮寺巡拝記』三話

異国セメ給シ時ノ御裳、今ニ
宇佐ノ弥勒寺ニヲサメラレタ
リ、色モ文モナアサヤカナリ

○『八幡宮寺巡拝記』三話

其後河上大明神しやうも聖母(神功
皇后のこと、引用者注)龍宮、
阿蘇縁起ニハ方士遣ト云々、云
ク我ハラメル子ハ男子也、太子
ヲムコニ奉ラン、其ノ情ニ乾珠、

并ニ満珠、借給トコヒ給フニ、
河上ノ大明神三日ヲヘテ、二ノ
玉ヲ持テ来ル、

○『宮寺縁事抄』「或説」

神功皇后ニ住吉大明神申ヲハ
君沙伽羅龍王之女也、異国速可
征伐也、而龍宮干玉可申請也
云々、皇后被仰曰、我然也、但
以誰人為使遣之乎、明神重申給
ハク、安曇イソヲヲ可遣使也、
皇后仰曰、何爾ニシテカ件物ヲ
可召乎、明神申云、件物楽好者
也、楽セ給給サセハ、自然ニ可
出来云々、因之於海上令調伎楽
御磯等参来。

○『八幡縁起絵巻』上巻・第三段

豊前国フナ木山ノ木ヲ切
テ宇佐郡ニテ船四十八艘造
リテ即鹿島ニテ乗船ノ軍兵
一千三百七十五人也大將軍ニハ
住吉并高良大臣也梶取ハ鹿島ノ

大明神也

○『八幡縁起絵巻』上巻・第五話

或縁起云肥前国佐嘉郡二御坐
ス河上ノ宮ニ彼ノ二ノ玉ハ納マ
ル長サ五寸許頭ハ二寸計尾ハホ
ソキ玉也

○『八幡縁起絵巻』下巻・第一段

其後皇后宮彼国ヲ討随テ筑前
国ニ還著給テ十日ト申スニ鶴ノ
羽ヲモテウフヤヲ造リ給テ槐ノ
木ニ取り付セ給テ皇子ヲウミ奉
リシ間彼所ヲハウミノ宮ト名付
ケタリ今ノ宇佐ノ宮

○『八幡縁起絵巻』下巻・第一段

又皇后ノ異国セメ給シ時御裳
ハ今ノ宇佐ノ弥勒寺ニヲサマレ
リ色モ文モナヲアサヤカナリ

四、社伝の中の神功皇后伝承

神社の由緒などの形で神功皇

后伝承が語り継がれているとこ

ろも多い。こうした社伝は起源
を確かめるのが難しいものも少
なくないが、伝承の伝播や普及
などを考える上で重要な資料と
いえる。

○**筥崎宮**

神功皇后が朝鮮出兵のあと、
十二月十四日宇美の里（福岡県
粕屋郡宇美町、現・福岡市宇美
町、引用者注）で応神天皇を出
産されて、その御胞衣（胎盤と
ヘソの緒）を筥に納めて、清浄
なこの地に埋めたのが十二月
三十一日の夜であった。（箱崎
の地名の起こりとされている。
埋められた場所には、標として
松が植えられ「筥松」と呼ばれ
ている）この由来から、今でも
筥松の前に神饌を供して「御胞
衣祭」が齋行されている。（田

村靖邦「筑前国一宮 筥崎宮」

『全国一宮祭祀記』所収）



筑前国一の宮 筥崎宮（地名譚となった筥松）

○**與止日女神社**

御祭神は「八幡宗廟之叔母、
神功皇后之妹」にます尊い神様
である。また一説に豊玉姫命（竜
宮城の乙姫様で神武天皇の御祖
母にます）とも伝えられている。
（徳久豊彦「肥前国一宮 與止
日女神社」『全国一宮祭祀記』
所収）

○**與止日女神社**

ただし、與止日女神社文書の
建久四（一一九三）年十月三日
付けの在庁官人署名在判の書状
に、「当社は、一國無双の靈神、
三韓征伐の尊社なり」と記され
ているから、古い時代から神功
皇后ゆかりの神社として崇めら
れていたことがわかる。

（略）

しかしながら、社伝による
と「神功皇后が朝鮮に進出のお
りに、海神を祭り、航海の安全
と戦勝を祈った。神功皇后の妹
に当たる與止日女命は磯童いそどうとと
もに鯰に乗って龍宮に到り、満
珠・干珠をもたらした。凱旋し
たのち、満珠・干珠はこの神社
に納められた」とあり、この伝
承の精度については疑問がある
ものの、いずれにしても神功皇

后と密接な関連を有する神社であることは間違いない。(河村哲夫『神功皇后の謎を解く』)

○西寒多神社

大分川支流の寒田川中流右岸に、豊後一宮とされる「西寒多神社」(大分市寒田)があるが、神功皇后が朝鮮出兵の帰途、西寒多山に登り、一本の白旗を奉納し、のちに応神天皇のときに武内宿禰が勅命により社殿を創建したという。(河村哲夫『神功皇后の謎を解く』)

○玉祖神社

社伝によると、天孫降臨の時に供奉した玉祖命がこの地に葬られ、その霊を祀ったのに始まるという。景行天皇12年の筑紫行幸の途中、当地に立ち寄った天皇が宝剣を奉納、続く仲哀天皇・神功皇后も立ち寄り、高田

の土で土器を作り吉凶を占ったという(防長風土注進案)。この土占いが、現在にまで伝わる占手神事である。(畠山聡「周防国」『中世諸国一の宮制の基礎的研究』所収)

○鹿兒島神宮(大隅国正八幡宮)

更に、対馬には別に、島南部豆殿に発した天道(天童)伝承として母子信仰が根付いていた。(略)対州神社誌は豆殿郡内院に伝わる天道伝承を詳述した後に、「又母公を中古より正八幡をいう」との俗説を紹介しつつも、それを否定する。

然るに何故にそのような俗説が横行したかは考慮されるべきである。その紛れた正八幡の俗説とは、周知のように、大隅正八幡縁起を指す。その正八幡縁起によれば、陳の大王の娘大比

留女が日光に感精し御子を産むが、母子ともに空船に乗せられ流され、寄り着いた先の大隅で祭られ正大隅八幡と称されたといい。天道伝承と正大隅八幡縁起は所謂日光感精神話という類型で括られ、さらに、それらと神功皇后伝承が母子信仰という枠で重層していく。(吉田修作「対馬の神功皇后伝承」)

○海神社

神功皇后新羅より還御の時、海上より木坂の山を御覧になり、此の山は神霊の強き山なりと宣ひ、山頂に鱸神を祀らせ給ふ。(社神明細帳)(吉田修作「対馬の神功皇后伝承」より孫引き)神功皇后三韓征伐の際、海上より我が和都美神を祭祀遊ばされ、其恩頼によりて三韓を降し給へり。故に御凱旋の折には

特に懇に当地御前浜に於て報賽の祭事を行はせらるる。(海神社由緒略記)(吉田修作「対馬の神功皇后伝承」より孫引き)

○天手長男神社

当社の祭神の中に神功皇后は含まれていないが、壱岐国神社誌が引く由緒によれば、神功皇后三韓征伐の時、功をなしたことで皇后自ら祀ったものと伝える。一方、宗像大菩薩縁起には、神功皇后新羅出兵の際に、宗像の神が異国征伐の旗竿という御手長振って敵を翻弄したので、帰還後その御手長を沖ノ島に立て置いたと記されている。(吉田修作「神功皇后伝承」肥前から壱岐へ)

五、祭礼の起源としての神功皇后伝承

各地の一の宮の祭礼・神事の中には、その起源を神功皇后伝承と結びつけて説明しているものもある。最後にその一部を紹介しよう。

○住吉大社

御田植神事（六月十四日・午後一時）

神功皇后が住吉大社を御鎮祭の時、長門国から植女を召されて御田を作らしめたのが、はじまりであると伝えられている。（住吉大社教室「摂津国一宮住吉大社」『全国一宮祭礼記』所収）

○氣比神宮

総参祭 七月二十二日
往古仲哀天皇の二年六月乙卯



越前国一の宮 氣比神宮（氣比鳥居を通じ外拜殿を臨む）

日、勅命により神功皇后が武内宿禰命以下百官を従えて、外征のため角鹿湊つめがより穴門国（長門国・山口県）豊浦宮に赴かれたという伝承を踏まえ、氣比祭神仲哀天皇が常宮祭神神功皇后を訪れられるという内容を持つ船祭りである。（桑原恒明「越前国一宮 氣比神宮」『全国一宮祭礼記』所収）

○玉祖神社

（占手神事は、引用者注）古記録には、仲哀天皇が熊襲征伐に際し、当社へ参られ軍いくさの吉凶を卜されたのが起源とするものや、神功皇后が三韓遠征の折、当社で戦勝の御祈願のため執行されたとするものなど区々であるが、古式を伝えていることには間違いはない。（吉野正修「周防国一宮 玉祖神社」『全国一宮祭礼記』所収）

○住吉神社（長門国）

和布刈祭（旧の元旦）

この祭りは、今から一七九〇年前、神功皇后が、神主はたら踐立に命じて、元旦未明、壇の浦のわかめを刈り採らせ、そのわかめを住吉大神に供えて、人々の幸せを祈ったことに始まる。（略）
お田植祭（五月第三日曜日）

千数百年前にさかのぼるが、神功皇后が住吉大神をこの地に祀り、毎日お米を供えるために神田を開発し、神主踐立に命じてお田植えの神事が行われるようになったという。（略）

御齋祭おいみさい（十二月八日から十五日）

（略）これは神功皇后が三韓遠征の後、御みずから住吉大神の神恩に感謝されて奉仕されたという故事に起因する。（岡本信彦「長門国一宮 住吉神社」『全国一宮祭礼記』所収）

○住吉神社（筑前国）

例大祭（十月十二日～十四日）

神功皇后が、三韓から凱旋され奉謝の祭りを齋行せられた神威赫々の祭りである。

神威を伺われた処、「流鏑馬と相撲を」との神託まにまの随々に、従軍の軍士に力を競わされた由

来に因り、この祭りを別名「相撲会祭」と讃え、往古は、土俵の周圍に棧敷を設えて、武士達も見物した。(横田豊「筑前国一宮 住吉神社」『全国一宮祭礼記』所収)

○都農神社

濱下り神事

(略) これは、神功皇后が、都濃の大神を軍船に請じ、新羅征伐の途に上らせた時、里人畏みて其御還幸の日まで、毎日暁天に起きて海辺に行き、身を祓い清めて御戦勝を御祈り奉った故事による風習で夏祭の起源だと伝わる。(永友元夫「日向国一宮 都農神社」『全国一宮祭礼記』所収)

○鹿島神宮

七月上旬中旬之神事ハ、我朝

第一之祭礼、三韓降伏天下泰平

之大神事也。具応神天皇之卷二見ヘタリ。昔彼異国之王頭鉾貫、大路波ヲ先陣後陣相共ニ、惣八竜神楯板筑、諸神官等甲冑帯、捧兵杖。是偏神功皇后応神天皇三韓降伏之祭事。(鹿島宮社例伝記)藤原彰「鹿島神宮の祭儀と空間構成について」より孫引き)

◇引用文献

- 『続日本紀』、「国史大系」第二卷、経済雑誌社、明治三十年
- 『風土記』上下、中村啓信監修訳注、角川ソフィア文庫、平成二十七年
- 落合偉洲・加藤健司・茂木栄・茂木貞純編『全国一宮祭礼記』、おうふう、平成十四年
- 河村哲夫『神功皇后の謎を解く』

《伝承地探訪》、原書房、平成二十五年

中世諸国一宮制研究会編『中世諸国一宮制の基礎的研究』、岩田書院、平成十二年

伊藤邦彦「諸国一宮制の展開」『歴史学研究』五〇〇号、昭和五十七年一月

藤原彰「鹿島神宮の祭儀と空間構成について」『日本建築学会計画系論文集』第四五九号、平成六年五月

吉田修作「神功皇后伝承——肥前から壱岐へ」『人文学部』16号、平成十八年二月、福岡女学院大学人文学部

吉田修作「異国へ巡行した(みこともち)神功皇后——新羅出兵・蒙古襲来・朝鮮侵略」『人文学部』17号、平成十九年二月、福岡女学院大学人文学部

吉田修作「対馬の神功皇后伝承」『比較文化』4号、平成十九年三月、福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要編纂委員会
筒井大祐「八幡縁起絵巻と『八幡宮寺巡拝記』」『京都語文』、佛教大学国語国文学会、平成二十四年十一月

執筆者紹介

☆渋谷申博氏(しぶやのぶひろ)
昭和三十五年、東京都生まれ。早稲田大学第一文学部卒。神道・仏教など日本の宗教史に関わる執筆活動をするかたわら、全国の社寺・聖地・聖地鉄道などのフィールドワークを続けている。主な著作に『全国天皇家ゆかりの神社・お寺めぐり』(G. B.)、『眠れなくなるほど面白い 図解 神社の話』(日本文芸社)、『図解はじめての神道と仏教』(ワン・パブリッシング)『諸国神社 一宮・二宮・三宮』(山川出版社)『猫の日本史』(出版芸術社)ほかがある。

沖縄県祖国復帰五十年を迎え

世界に誇る日本民族の歴史、沖縄県祖国復帰

令和四年度総会は沖縄県祖国復帰五十年の嘉節を言祝ぎ、琉球国一の宮波上宮を会場に開催し講演会を開催する予定でした。誌面巻頭に記載の通り感染症の影響により諸行事は中止となりましたが、四年度総会にて講演会講師をお願いしておりました(一社) 日本沖縄政策研究フォーラム 仲村覚理事長様より現代日本及び日本人が意識し覚悟せねばならない国際観をご寄稿下さいました。

また、波上宮渡慶次警宮司様には県神社庁長として沖縄県祖国復帰五十年を期して嘗て神社新報へ寄稿された文章を、産経新聞沖縄支局 川瀬局長様には波上宮大山晋吾禰宜様へのインタビューを通じて沖縄県民の信仰心を的確に纏められた記事を特別にご了解いただき転載させていただきました。

各文章を通じ我が国の立場、民族の誇り、復興への軌跡と心豊かな県民性を理解していただく一助となればと思います。

(編集部)



■沖縄県祖国復帰五〇周年は、 日本民族再統一記念日

一般社団法人 日本沖縄政策
研究フォーラム

理事長 仲村 覚



今年、沖縄県が祖国日本に復帰して五〇周年という節目の年です。私が理事長を務める日本沖縄政策研究フォーラムでは、祖国復帰記念日を最も重要な日と位置づけ、毎年その前後の週末に靖国神社で記念式典や祭典、祝賀パレードを実施してきました。靖国会館で行うことにはこだわりがありました。そ

れは、大東亜戦争末期の沖縄戦と沖縄県祖国復帰は決して切り離して考えることができないからです。また、沖縄戦で戦ったのは決して沖縄出身の軍人だけではありません。三〇〇人以上の特攻隊員を含めて、全国47の都道府県出身の若者が散華されたのが沖縄戦であり、彼らが命をかけて守った沖縄が日本に戻ってきたのが沖縄県祖国復帰なのです。毎年五月一五日は、本来なら、国会議員が靖国神社に参拝して、「沖縄戦の御英霊の皆様、皆様が命をかけて守った沖縄が祖国日本に復帰して五〇周年が経過いたしました。これからも、沖縄が決して他国に侵略されたり、植民地になつたり、日本から分断されることが無いように、我ら、日本民族

「団結して守ってまいります！」と誓うべき日ではないかと思えます。

私は歴史には、大きく三種類あると思います。個人や家族の歴史、会社や地方の歴史、そして、国家、民族の歴史です。それぞれ、共有する範囲が異なります。では、沖縄県祖国復帰の歴史は地方の歴史でしょうか？それとも、国家民族の歴史でしょうか？私は、大きな声で、国家・民族の歴史だと叫びたいのです。何故なら、沖縄戦は、日本民族の存亡をかけて、すべての都道府県出身者の命をかけて戦った戦いであり、沖縄県祖国復帰は、敗戦により分断された民族が27年後に再び一つになった日だからです。だからこそ、沖縄県祖国復帰記念日

は全国民をあげて祝うべき記念日だと思っております。

■沖縄問題の本質は歴史の分断、そして民族意識の分断。

沖縄問題を10年以上続けてきて考え続けてきたことがあります。それは、日本民族の定義です。考え続けてたどり着いた結論は以下のとおりです。「日本民族とは、歴史と使命を共有した共同体である」。歴史を共有するからこそ、民族として共通の使命を持つことが出来、また民族とは、滅びるのも一緒、栄えるのも一緒で、一つの船に乗る運命共同体だということです。国家が栄えるためには、このような民族同胞意識が必要不可欠です。しかし、私達殆どの日本人はGHQの占領政策により知らない間にそのような精神

を失ってしまったのです。そして、沖縄戦や沖縄県祖国復帰という日本民族再統一の歴史を、自分とはほとんど関係のない沖縄という地方の歴史だと勘違いさせられてしまっていたのではないのでしょうか。

そのような民族意識の喪失、分断は、平時には大きな問題になりませんが、ひとたび、有事となると国家存亡がかかった大問題となります。しかし、中国の軍事脅威が高まった中、現在の政府では、防衛費の増額に動き始めたものの、沖縄は日本や日本軍の被害者とする精神的分断工作に対する防衛策は皆無であり非常に危険な状態なのです。

■世界に誇る日本民族の誇り！ 沖縄県祖国復帰

さて、改めて客観的に沖縄県祖国復帰の歴史というのを確認してみたいと思います。日本は、建国以来2700年近い歴史を有しますが、その間、日本民族が戦争に敗れて、屈辱の分断統治を受けたのは、大東亜戦争直後の奄美、沖縄だけです。そして、祖国復帰運動を展開し民族再統一を果たしたのは1度だけです。それもわずか27年という短い期間で、戦争ではなく外交交渉で実現したのです。敗戦により分断統治をされた国は多数あります。南北朝鮮もいまだに統一することが出来ません。また、清国がイギリスに負け、香港を譲りましたが、香港には同じ漢民族が多く住んでい

ますが、一度も復帰運動が起きたことがありません。逆に、祖国である中国に統一されたくないという反対デモが激しく起きたのです。沖縄の歴史とは全く逆なのです。つまり、日本民族とは世界に比類なく、民族の団結力が強い民族なのです。米国が沖縄を切り離そう、切り離そうと様々な圧力をかけても、その意志に反して、沖縄の祖国復帰熱は高まり短期間で米国を諦めさせたのが、沖縄県祖国復帰の歴史なのです。沖縄を復帰させた、最大の原動力は、沖縄のリーダーの日本人としての矜持であり、日本語による学校教育と、米軍の禁止を押し切った日の丸掲揚運動です。これこそが、世界に誇る日本民族の誇りではないでしょうか？

これは、決して大げさではありません。例えば、沖縄は米軍統治下でも、英語が共用後になることはありませんでした。スペイン・ポルトガルの大航海時代以来、アジア、アフリカの多くの国や地域が欧米諸国の植民地になりましたが、支配国の言語が公用語にならなかったのは、沖縄だけではないでしょうか。このように、沖縄県祖国復帰の歴史は、民族の苦難の中、日本人で有り続けるために何が必要なのか教えてくれる教訓に満ちています。それは、日本民族の宝物です。しかし、現在の日本では、沖縄県祖国復帰の歴史がまるで基地撤去運動だったかのようにすり替えられ、日米の被害者の歴史であるかのように

伝えられてしまっています。このままでは、後世に残すべき、日本民族の歴史が失われてしまうため、「沖縄県祖国復帰50周年記念映画ドキュメンタリー映画 島人（しまんちゅ）の戦後秘史―歴史の証人―」を企画しました。その映画では、沖縄県祖国復帰の実現に大きな貢献をされた方から5人を選び出し、毎年1本ずつ制作し、その情熱を映像として残したいと考えています。その、第1作目として、今年5月に「仲村俊子と沖縄返還協定批准貫徹実行委員会」がリリースされました。https://teket.jp/3873/13511 から動画配信サービスご購入も可能です。

沖縄をめぐる様々な攪乱情報が出回ったとしても、事前にこ

の映画をご覧いただければ、決して揺らぐことのない民族の一体感を取り戻すことができるものと確信しております。

執筆者紹介

仲村覚氏（なかもらさとる）

昭和三十九年、那覇市生まれ。昭和五十四年、陸上自衛隊少年工科学校（横須賀）入校。卒業後、航空部隊に配属。複数の企業勤務を経て、「日本は沖縄から中国の植民地になる」という強い危機感から活動を開始。平成二十八年に「一般社団法人・日本沖縄政策研究フォーラム」を設立。同法人は、中国共産党が仕掛ける沖縄の歴史戦と本格的に戦う唯一の組織。新聞雑誌等に「沖縄問題の第一人者」として論文を多数寄稿。

沖縄本土復帰五十周年に寄せて ユイマールの絆を強め

沖縄県神社庁

庁長 渡慶次 馨

沖縄は今年、祖国復帰五十年の佳節を迎えました。畏くも、今年の天長節の日には天皇陛下より「先の大戦で、悲惨な地上戦の舞台となり、その後、約二十七年間も日本国の施政下から外れた沖縄は、人々の強い願いの下、五十年前日本への復帰を果たしました。この間、今日に至るまで、沖縄の人々は本当に多くの苦難を乗り越えてきたものと思いますし、このことを決して忘れてはならないと思います。本土復帰から五十年の節目となる今年、私自身も、今まで沖縄がたどってきた道のりを今一度見つめ直し、沖縄の地と

沖縄の皆さんに心を寄せていきたいと思います」との大御言を賜りました。昭和天皇、上皇陛下、今上陛下と受け継がれる大御心に感激一入です。



戦災前の波上宮社殿

熾烈な沖縄戦と戦後の米国統治

沖縄県は七十七年前の大東亜戦争末期、祖国防衛のため御国の御盾として県民をも巻き込んだ友軍と連合国軍との熾烈極

まる戦ひで焦土と化しました。沖縄を守備する十一万の友軍と、近代化学兵器を総動員した十八万の米軍との攻防戦は、友軍の戦死者約九万四千人とアメリカ側の戦死者約二万二千人、加へて約九万人にのぼる沖縄県民の尊い命を奪ひました。

三カ月に互り、沖縄県民は軍と共に必死に戦ひ、米軍は沖縄戦での甚大な被害から本土上陸作戦を諦め、日本の国体が保たれたともいはれてゐます。

沖縄戦は日本国内初の地上戦で、とりわけ、健気な中学生や女学生を中心とした学徒隊が任務につき、軍官民が一体となつて防衛戦を遂行した点に大きな特徴があります。その様子は、昭和二十年六月六日に海軍次官へと送られた、大田実中将の有

名な訣別電文「沖縄県民斯く戦へり県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」でも伝えられました。



被災直後の波上宮鳥居前

戦後、サンフランシスコ講和条約で琉球諸島は合衆国を施政権者とした国際連合信託統治とされました。その情報に接した沖縄県民は、未来永劫祖国に戻れなくなる危機を感じ、祖国復帰の署名運動や歎願を始めまし

た。しかし結局、同条約で米国の施政権下におかれ続けることになり、県民には大きな衝撃でしたが、諦めることなく米軍圧力下での日の丸掲揚運動などをおこなひました。また講和条約前、日本政府も沖縄の主権を失はないやうさまざまな外交交渉を戦つてゐました。

昭和二十八年二月十九日に沖縄教職員会会長の屋良朝苗（のちに初代知事）は、国会の衆議院文部委員会で以下のやうに演説してゐます。「一連の共通の文化と歴史を持ち、日本人としての民族的矜持を有する沖縄の住民が、どうしても異民族の統治下に満足しておられましようか」と、子供たちに日本人としての教育を施したい、といふ強い思ひを訴へました。

さらに特筆すべきは、昭和天皇が連合国に提案されてゐた「施政権は米国に租借するが主権は日本に残す」といふ「潜在主権方式」です。講和条約締結の際にこの合意があつたので、それが県民の復帰運動の根拠となり、講和条約から二十年後の昭和四十七年五月十五日に米軍統治が終はり、祖国復帰が叶ひました。



琉球国一の宮 波上宮

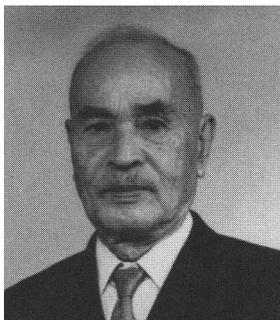
昭和天皇からは、「本日、多年の願望であつた沖縄の復帰が実現したことは、まことに喜びにたえません。……この機会に、さきの戦争中および戦後を通じて、沖縄県民のうけた大きな犠牲をいたみ、長い間の労苦を心からねぎらうとともに、今後全国民がさらに協力して、平和で豊かな沖縄県の建設と発展のために力を尽くすよう切に希望します」とのお言葉を賜りました。

沖縄の復帰運動は昭和三十年代中頃から活性化し、とくに中国は在沖米軍を撤退させるため沖縄返還運動を支持し、日本の共産党や新左翼も当初は熱心に祖国復帰運動をおこなひました。しかし、祖国復帰が米軍基地を残す形でおこなはれたこと

で中国やその同調勢力の思惑は外れ、日の丸運動も中止になりました。安保闘争や基地抜き沖縄返還運動の背後には中国共産党があり、現在の反米基地運動へとつながつてゐます。

戦後の神社復興と神社界の歩み

戦後、波上宮復興に努め、昭和四十七年の祖国復帰の時に沖縄県神社庁の初代庁長となられた上原恵理宮司は終戦直後の様子について、琉歌に「朝夕拝みたるなんみんのおみや みるか



元波上宮宮司 上原恵理氏

たやねらん鳥居びけい」と歌はれ、茫然自失したといはれました。当時、沖縄県の文化・財産のすべてが悉く灰燼に帰しました。また祖国復帰が叶ふ昭和四十七年までの二十七年間に互る米軍統治下のもと宗教法人法も施行されず、戦前の宗教団体法しか適用されない神社の復興は困難を極めました。しかし昭和二十八年にハワイ在住の沖縄県出身の婦人の会や、うるま一心会など心ある人々のふるさと沖縄の復興を願ふ熱い志の浄財をもって波上宮と普天満宮の御本殿が再建され、戦後復興の途につきました。

そして昭和四十七年五月十五日、沖縄県の祖国復帰が叶ひ、同日沖縄県神社庁が設立されました。設立には神社本庁の総力



復興を果たした現在の波上宮鳥居前

を挙げての万全の対策指導がなされ、合はせて全国神社界の温かい支援をもって管内十社を包括する神社庁の今日があります。初代・上原庁長、吉田玄蕃庁長、片岡友次庁長、そして平成二年から二十七年の長きに互り県神社界を指導牽引されました末安大孝庁長と、新垣義夫副庁長以下管内神社の神職役員

の御尽力により琉球八社をはじめとする神社の復興と祭祀の厳修が進められてきました。

しかしながら戦後境内地を失った三社の復興といふ重責も残されてゐますので、五十周年を期に管内十社神職数三十人の微力な神社庁ではありますが、相互に補助し合ひ譲り合ふユイマールの心根で遅くとも着実にその歩みを進める所存です。

大御心への感謝と現在の課題

終戦の翌年より戦禍に傷ついた全国民を激励しようと始められました全国御巡幸も、唯一沖縄県だけは叶ひませんでした。「思はざる病となりぬ沖縄をたづねて果さむつとめありしを」との、昭和天皇の沖縄を思はれ

る大御心を受け継がれ、上皇陛下には皇太子時代の昭和五十年、沖縄国際海洋博覧会に際しての初の行啓以来、実に五回の行啓をお重ねになられました。さらに御即位後には天皇陛下として、平成五年の第四十四回国植樹祭、終戦五十年慰霊の旅、国立劇場おきなわ開場、復帰四十一年の第三十二回全国豊かな海づくり大会、平成二十六年の学童疎開船対馬丸事件より七十年慰霊の旅、平成三十年の離島御視察と行幸をお重ねになられ、行啓・行幸合はせて十一回に及ばれたのは、洵に感激の上ないことでした。そして、そのすべてが真つ先に戦死者の慰霊のお祈りからお始めになられてゐます。万世一系連綿と「国やすかれ、民やすかれ」とお祈

り下さる大御心に、心ある県民はそのつど感謝の誠を捧げてきました。

沖繩の米国統治からの祖国復帰が平和裡になされたことは、日本や世界の歴史でも劃期的意味があります。半世紀を経た現在には奇しくも沖繩や日本、世界にとっても大きな分岐点にあり、東欧においてはロシアのウクライナ侵攻、また極東においては台湾や尖閣諸島に対する中共の脅威があります。隣国の共産中国は、香港やチベット・モンゴル、さらに欧米諸国などもジェノサイドとして非難する新疆ウイグル自治区での弾圧に加へ、軍事力を急速に拡大しながら国際法に反して南シナ海の自国領海化を進めるとともに、台湾・尖閣諸島を狙ってをり、沖

繩も危機的状態にあります。

この秋にあたり、私ども県民は祖国復帰五十年をまごころからお祝ひ申し上げつつ、深く世界の平和を希求し、正しく世界の動向を把握するとともに、時局の推移を見誤ることなく、県の平穏な発展と繁栄を祈り、ユイマールの絆を強めつつ、実践行動しなくてはなりません。

(沖繩・波上宮宮司)

※神社新報 令和四年五月十六日号より転載

沖繩考ー波上宮の「願い事」

産経新聞那覇支局長

川 瀬 弘 至

むかしむかし、沖繩に崎山の里主という者がいて、浜辺で光輝く不思議な石を拾った。それを知った人々が石を奪おうとしたため、里主は逃げ、海岸にせ

り出す大岩に登ったところで神のお告げをうけた。

「われは熊野権現なり。この地に社を建てれば国家を鎮護すべし」。里主は王府に進言し、王府は社殿を建てて篤く祭った…。

那覇市若狭にある沖繩の総鎮守、波上宮に伝わる創建の由緒である。

祢宜の大山晋吾さん(61)が教えてくれた。

「沖繩の人は、本土の人よりも敬神の念が篤いんです。神々をあがめて先祖を敬うという、現代の日本人が忘れつつある心を今も持っています」

そういう大山さんは、「沖繩の人」ではない。もとは靖國神社の神職で、戦没者の遺品などを収蔵する遊就館の管理運営に

長年携わってきた。縁あって十年前に波上宮へ移籍したが、それは「英霊のお導きでしょう」という。

《つばさ散り 操縦桿は折る、とも 求めてやまじ 沖繩の海》
移籍前に心を寄せた、特攻隊員の遺詠である。

ところが波上宮に来て、まず驚いたのが県民の信心深さだっ



波上宮神域近くに掛る赤い欄干の海上橋

た。一人一人の参拝時間が長いのだ。手を合わせて五分、十分、中には座り込んで二十分、三十分と拝む人もいる。

昔から台風などの災害が多く、自然への畏怖心が強いことが敬神の念につながっているのだろう。言葉を交わせば純朴で、温厚で、慣習を大切に保守的な人が実が多い。

「東京にいた頃はテレビで過激な反米集会などをみて、何と左翼的な県民性だろうと思っていたましたが、全くの誤解でした」
大山さんは頭をかいた。

その名の通り、波上宮は海を見下ろす断崖の上に建つ。祭神は伊弉冉尊など熊野の神々。創建の年は定かではないが、隣接する護国寺の建立が、一三六八

年なので同じ頃だろう。

もともと沖縄には御嶽とよばれる自然崇拜の聖域が無数にあつて、波上宮のある断崖も、海のかなたの神々の国（ニライカナイ）に祈りをささげる聖域だった。

それと本土の熊野信仰が結びつき、琉球王府も篤く保護する大神社となったのだ。

琉球貿易が盛んだった頃、出航する商船などは波上宮を仰ぎ見つつ航海の平穏を祈り、帰航の際は無事を感じたという。

今も「ナンミンさん」の愛称で尊崇を集め、新型コロナウイルス禍の前には、正月三が日だけで毎年二十万〜三十万人が参拝した。

大山さんがいう。

「沖縄は本土と異なると思われがちですが、まぎれもなく日本であることは、当宮への熱心な参拝者をもても明らかです」

むしろ、日本の心を忘れてしまったのは本土かもしれない。

沖縄の本土復帰後、急速に都市開発が進む中で、波上宮の前の海を横切るように片側2車線の海上橋が二本もつくられた。

一本目が開通したのは、昭和五十九年。この時は施工業者も波上宮に敬意を示し、橋の欄干を鳥居のように赤く塗装するなごした。

だが、平成二十三年に開通した二本目は何ら敬意を示さず、欄干を塗装することもなかった。

発注したのは国だ。海上橋によ

り那覇市の中心部と空港などが短時間で結ばれるようになったが、ニライカナイからの「神々の道」は遮られた。

「せめて欄干を赤く塗ってほしいのですが…」

この願い事を、かなえてもらいたい。大きなバチが当たる前に…。

※産経新聞 令和四年三月三十一日号
朝刊より転載



平成23年に開通した海上橋

【一の宮を巡拝する想い】

一の宮巡拝会について

代表世話人 塩原輝昭



一之宮貫前神社にて

一の宮巡拝会 第三代 代表世話人を努めさせて頂いております
塩原輝昭と申します。

早くから原稿依頼を受けて有り難く、「巡拝会と全国一の宮会との間柄を書ける物と思つて」おりましたがいざ書き始めると、あまりにも多くの事象を次々に思い

起こしてしまい深い物思いに浸かって何を書いたら良いのか：優柔普段な自分を見てしまいました。

令和二年一月二十日～二月三日に掛けて、香港～ベトナム～台湾～沖縄を周遊して、横浜港に帰港したダイヤモンドプリンセス号から始まったコロナ感染症は徐々に拡大確認されて大きな事件へと発展し、形を替えたウイルスが三年目を迎えている今日も、私たちの行動を妨げている現況です。

昨今少しづつ平常に戻りつつある様に見受けられますがまだまだ完全では無い毎日を過ごしております。

そうした中に在って全国一の宮神社様始め日本全国の神社・仏閣様の職員様方がたの、日毎「疫病祓」の厚い御祈念を続けて下さっている御姿に深く感謝申し上げます。次第でございます。真にありがとうございます。

当然乍ら私たち個人も一層注意と自己管理を徹底して参拝を続け

て参りたいと会内部でも模策しているところがございます。

一日も早く平常な日々が戻り来る事を望んでおります。が之も神々様の謀りごとだと思える試練の時間なのかもしれません。

などと自分に言い聞かせて、無事に生かさせて頂いている事に感謝しています。

一の宮巡拝会をひも解く時、私にとつては忘れる事が出来ない偉大なる2人の先駆者がおられた事を思い起こします。

私は或る神道の団体に属しておりましたが・師と仰いだ先生が徐々に先生の意図する事(金銭執着考)に賛同する事が出来ず、平成七年退会いたしました。

退会と同時期、伊勢国一の宮椿大神社の東京講が主催している勉強会に入会参加する事により新たな道が開かれました。

それは山本行隆宮司様(第九十六代 神世相伝神主)との出合に依つて神社神道に導かれた事でした。新たな神社神道の世界

で学びと修行という教授を仰ぎました。

平成12年 山本行隆宮司様の推薦を受けて京都神社庁にて直階の取得も致しました。新しい世界が開けて自身を再スタート出来ました。

平成十三年五月に所要で椿大神社に来訪した入江孝一郎先生にお目に掛る事も出来ました。当日は椿大神社「神山・入道ヶ岳 奥宮」登拝日で、その中に交えて普通の皮靴のまま登拝した強者でした。

その日の帰路、東京迄同行出来た事により、全国一の宮会及び一の宮巡拝会の存在を知る事となり、その後は一氣に山本行隆宮司様と入江孝一郎先生の百万人巡拝運動に共鳴し巡拝会の会員となりました。

入江孝一郎先生の発案から、一の宮巡拝会主催の「壱岐ルネッサンス」敵味方鎮魂慰霊祭を始め、数々の鎮魂慰霊祭のイベントを各地で開催して行く中、平成十五年八月一日に、私が最も師と仰いだ

椿大神社の山本行隆宮司がご逝去された。そして平成十七年一月十三日入江孝一郎先生もご逝去されて尊敬する二師が天界へと旅立たれてしまわれました。

深く憔悴して居るだけではない状況が残されていたので、世話人会から総会を経て平成17年2月20日に「第二代代表世話人関口行弘と副代表 世話人に塩原輝昭」が推薦され先ずは入江イズムの継承を実践しました。

主なもの

*平成17年4月12日～16日

於：熊本県蓮華院誕生寺「ドライアマ14世 講演会」ハンバラマチョイザム 狎下 モンゴルから来訪。

*平成17年6月26日

於：靖国神社・靖国会館「戊辰戦争全戦没者慰霊祭」神籬神事から郡歴史先生講演会。

*平成18年9月16日～17日

於：奈良市生涯学習センター「奈良一の宮シンポジウム&社叢百景展」
コーイチパリッシュ様・秩父神社宮

司 蘭田稔様・高野山蓮華院 東山泰清大僧正様・ダスティン・キッド様・齋藤盛之様。 司会 関口行弘様で実施 大盛況で終了しました。

*平成19年9月8日～10日

於：アメリカ・シアトル 椿大神社「一の宮シンポジウム&一の宮絵画と写真展」開催。

*平成19年10月10日

斐伊川手漉き和紙 一の宮御朱印帳 完成

*平成21年6月20日

於：尾張国一の宮 真清田神社「巡拝会10周年記念全国交流会&尾張一の宮シンポジウム」開催。

*平成27年～クラッ「一の宮めぐり」

ヘナビゲーター2名(村上彰・大谷武司) 派遣。

平成26年4月26日(土) 於：知知夫

国一の宮・秩父神社「一の宮巡拝会総会」に於いて第三代代表世話人に塩原輝昭が拝命。神社ブームが湧き上がっている中、鎮魂慰霊ばかりでは無く新たな展望を見据えた活動と巡拝普及を理念と致しました。

*平成25年は20年に一度の神宮御遷

宮、60年に一度の出雲大社「平成の大遷宮」等ダブル御遷宮年で、特に日本古来の良さが見直された事も有り、全国神社参拝&一の宮巡拝の旅が注目を集めて居りました。

そうした事から一層会の発展を願ひ会員相互交流の場として巡拝会の更なる充実を図るべく今日に至っております。全国一の宮会様のご指導を向後も、どうぞ変わりになくご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

お願い
コロナ禍、御朱印の書置きが多くなりましたが：全国一の宮会並びに当巡拝会発刊の一の宮専用の御朱印帳を携えて巡拝されている方々から手書きをして頂けないものかとの旨、要望が事務局へ多く連絡が有ります。

お願い

諸般のご事情が在るかと思存しますが：遠方迄行かれる巡拝者の思いをおくみ取り頂き、一日も早くコロナ前のご接待をお願い申し上げます。

諸般のご事情が在るかと思存しますが：遠方迄行かれる巡拝者の思いをおくみ取り頂き、一日も早くコロナ前のご接待をお願い申し上げます。

一の宮神社巡拝記
一の宮巡拝会員

湯川 雪路



甲斐駒ヶ岳より富士山を拝する

諸国一の宮神社巡拝の一巡目は平成二十年から平成二十九年の九年間で巡拝成就することができました。振り返るとさまざまな出逢いがありました。

東北巡拝では鳥海山(出羽国鳥海山大物忌神社)や岩木山(津軽国岩木山神社)東北の地に、雄大にそびえる姿に心を奪われ、山に

全く関心がなかった私が登拝を始めるきっかけとなった御山との出逢い。

一の宮神社巡拝をしていなければ行くことはなかったであろう佐渡島、隠岐島、壹岐・対馬の自然や伝統・文化にふれたことで本州とは違った心地良さがあることを感じた島との出逢いでした。

また一の宮神社と新一の宮を含め完拝すると日本全国をほぼまわる事となり秋田県の古四王神社と東京都の小野神社参拝で御朱印を頂き、四十七都道府県すべての神様との出逢いがありました。

全国を参拝できたことは人と接する上で必ず共通する話題がありそこからまた新たな情報を得ることで日本は素晴らしい国だと改めて思い知ることとなりました。

一の宮神社巡拝での様々な出逢いから、より一層充実した日々を過ごさせていただいております。

ただいま二巡目を巡拝中ですが大和国大神神社へ参拝のおり、全国一の宮会より御朱印帳を保存す

るための巡拝達成記念文庫を戴きました。

完拝した御朱印帳で毎朝一社一頁の国名・神社名・御祭神名を唱えており、今まで本棚から出し入れをしていましたが文庫を戴いてからは朝文庫から取り出し夜文庫に収めることを始めたところ、日に日に丁寧な扱いになつていく所作に自分自身が驚きました。文庫を戴いたことへの感謝と神社でいただく御朱印の有り難さを痛感いたしました。

そして何より御朱印に宿る神様が巡拝達成記念の文庫へ収められ

ていることを喜んでいるような気がいたします。

二巡目はまだ登拝していない陸中国駒形神社の駒形山、伊勢国椿大神社の入道ヶ岳、阿波国大麻比古神社の大麻山、豊後国西寒多神社の本宮山等へ参拝し、島では自然を満喫しながらのんびりと過ごし、もつと日本を知り人とのふれあいを大切にして、全国一の宮会発刊の「全国一の宮めぐり」「旅する一の宮」と共に一の宮神社巡拝を続ける所存でございます。



巡拝完遂の朱印掛軸

全国一の宮朱印帳と巡拝達成記念品「文庫」について

当会では、「全国一の宮御朱印帳」大小二種【当会オリジナル(小)、一の宮巡拝会(大)】を携えて全国一〇一社の宮巡拝を終えられた方に、巡拝達成記念品「文庫」を贈呈しております。

心を込めて巡拝成された信仰の証である朱印帳を子孫への無言の訓として家宝として永く保存していただけたらという思いから平成二十八年九月より全国一の宮会より各会員神社を通じてお頒けしております。

会員各神社におかれましては、右当会指定の御朱印帳を持参され巡拝達成報告にお申し出の崇敬者の方には、全国一〇一社御朱印押印を確認の上、条件を満たしていれば左記要項をご記載いただき事務局までご連絡下さい。巡拝達成者の方に「文庫」拜送のお取り次ぎを事務局にて致します。

- ◎ご連絡事項
- ① 巡拝達成者の氏名・住所・電話番号
- ② 文庫大・小の別
- ③ お取り扱い神社名・ご担当者



贈呈開始より令和三年六月三十日迄の約四年間で巡拝達成報告者は一三〇名でした。(年平均三五名)令和三年度(三年七月一日〜四年六月三十日)は二九名より巡拝達成のご報告をいただき「文庫」を贈呈致しました。

全国一の宮会 沿革③(平成十七年)

年代	動向
平成十七年 二月二十二日 七月二十九日 三十日	<p>諸國において古い由緒を有し信仰篤く地域の柱と云える「一の宮」の古社が手を携え、御神徳の発揚を目的として平成三年十月八日に発足爾来、会は年数を重ね、徐々に組織が強固なものとなりつつある。当時神社は、自然保護や環境問題への意識の高まりの中で、日本人の精神の故郷、文化の源流としての認識を高める処として脚光を浴びている状況であった。そのような世情に於いて、今後は事業面での充実を図り更なる会の発展・一の宮巡拝促進の一助となるべく企画の審議が種々為されていくことになる。予てより計画を取り進めていた全国一の宮会特製の『御朱印帳』また、ガイドブック『全国一の宮めぐり』が出来上がり、平成十五年十二月より発刊され、いよいよ頒布開始の運びとなる。今後益々の全国的参拝の促進が期待されていく。</p> <p>平成十六年度 後期役員会並東海地区会員打合せ会開催 (当番神社 南宮大社) 於 南宮大社社務所 三十一名出席。次期総会開催について、御朱印帳・新書籍一の宮ガイドブックの取扱状況の審議、会務中間報告が為される。</p> <p>平成十七年度総会、前期役員会開催 (当番神社 真清田神社) 於 真清田神社参集殿 四十三名出席。総会後一宮七夕祭を見学。 J R東海 葛西敏之会長(当時)に「二十一世紀初頭における日本の課題と選択」と題して「講演を頂く。 研修会では、万博五十年の歴史の中で初めて日本文化の核である神道精神である森の文化「自然との共生」をメインテーマに長久手会場にて開催となった「二〇〇五年日本国際博覧会」(略称…愛知万博、愛称・愛・地球博)の見学を行う。 テーマ「自然の叡智」 (サブテーマ) ① 宇宙・生命と情報 ② 人生の「わざ」と智慧 ③ 循環型社会 最新技術と日本古来より連綿と今に続く伝統との融合を間近に感じ、今後益々の全国一の宮会の発展・活性化への尊く核心的なヒントを多く得る事が出来、実り多い研修となる。</p>

〈以降は次号へ続く〉

【人事】(令和三年七月一日〜令和四年六月三十日)

〈就任〉	
吉田 源彦氏	蝦夷地一の宮 北海道神宮 名誉宮司就任 令和三年 七月 一日
間島誉史秀氏	蝦夷地一の宮 北海道神宮 宮 司就任 令和三年十一月 一日
平尾 千藏氏	近江国一の宮 建部大社 名誉宮司就任 令和三年十一月 一日
佐藤 和夫氏	近江国一の宮 建部大社 宮 司就任 令和四年 二月 一日
飯田 博信氏	大和国一の宮 大神神社 権宮司就任 令和四年 二月 一日
平岡 昌彦氏	大和国一の宮 大神神社 権宮司就任 令和四年 三月 一日
高井 俊光氏	山城国一の宮 賀茂別雷神社 権宮司就任 令和四年 四月 一日
毛利 正彦氏	下野国一の宮 宇都宮二荒山神社 権宮司就任 令和四年 五月二十四日
梶 道嗣氏	若狭国一の宮 若狭彦神社 宮司特任就任 令和四年 五月二十六日
芝 幸介氏	伊勢国一の宮 椿大神社 権宮司就任 令和四年 五月二十六日
〈神社本庁定例表彰〉	
○表彰規程第二条第二号(特級昇進)	
岡嶋 千暁氏	安房国一の宮 安房神社 宮 司 令和四年 二月 三日
中磨 輝美氏	下野国一の宮 日光二荒山神社 宮 司
村山 和臣氏	加賀国一の宮 白山比咩神社 宮 司
中東 弘氏	河内国一の宮 枚岡神社 宮 司
本名 孝至氏	淡路国一の宮 伊弉諾神宮 宮 司
渡慶次 馨氏	琉球国一の宮 波上宮 宮 司
○表彰規程第二条第一号	
阿部 徳氏	下野国一の宮 宇都宮二荒山神社 宮 司
○表彰規程第三条第二号	
井上 浩之氏	相模国一の宮 寒川神社 禰宜
長倉 基博氏	相模国一の宮 寒川神社 権禰宜
間島誉史秀氏	蝦夷地一の宮 北海道神宮 宮 司
内海 明紀氏	山城国一の宮 賀茂御祖神社 権宮司
三島 安詔氏	伊予国一の宮 大山祇神社 宮 司
西内 真弓氏	土佐国一の宮 土佐神社 権禰宜
〈神職階位浄階検定合格〉	
太郎館 学氏	伊賀国一の宮 敢國神社 宮 司 令和四年 三月 一日
野坂 元明氏	安芸国一の宮 嚴島神社 宮 司

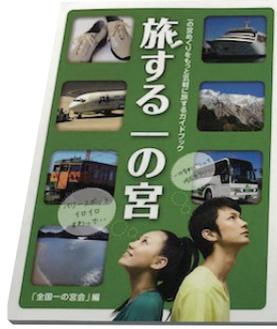
【帰幽】(令和三年七月一日〜令和四年六月三十日)

海部 光彦氏	丹後国一の宮 籠神社 名誉宮司 令和三年十一月 八日
高木 龍彦氏	若狭国一の宮 若狭彦神社 宮 司 令和四年 一月二十三日

『旅する一の宮』改訂新版発行！

「全国一の宮をもっと気軽に楽しく」をコンセプトに編輯されたガイドブック『旅する一の宮』は平成二十年に刊行以来、各会員神社の基礎情報は固より地域の観光や特産物を網羅する内容が好評を博し版を重ね約一万部を取り扱ってきました。

そこで今回初版発行平成24年より十年を経て重版を検討した処、



内容見本

会員各神社では御造営や記念事業等に依り神域・境内の様子が新まったり、又、交通網の発達により、周辺道路が変更になっている等、多くの修正の必要性を感じ、各神社に掲載内容をご確認し校正することとなりました。

すると、流石に地域に密着された各社ご担当者皆様によるご指摘は幾多に及び施設の名称変更や廃止又は料金変更等、内容差し替えの提案を数多く頂き、更には神域の説明に於ける細かな確認と訂正を頂くなど、内容量は従来と同じと云えど、最新の一の宮ガイドブックが茲に完成する運びとなりました。

発刊は今年度中に行い、各神社にご案内申し上げます。

会員卸価格は据え置き(〇〇〇円)とさせて頂きます。

広くご採用下さり、社頭頒布品、参拝記念品等にご利用下さいます様、宜しくお願い申し上げます。

頒布品のご案内

【全国一の宮御朱印帳】①

全国に鎮座する一の宮の御朱印を一冊に授かれる一般的なコンパクトサイズの御朱印帳です。

中には、一の宮の所在地表も同封されており鎮座地を確認することができます。

(会員神社卸価格 〇〇〇円)

【全国一の宮めぐり】②

ポケットサイズのコンパクトながら、全国一の宮の情報満載！

全国一の宮を網羅するポケットに収納しやすいB6手のひらサイズで、巡拝の相伴に最適の一冊。

(会員神社卸価格 〇〇〇円)

【御朱印帳特製巾着袋】③

御朱印帳(小)がすっぽり入る巾着袋でブルーとピンクの二種。

ブルーは青海波、ピンクは雲立涌の文様に「一の宮」の文字を随所にあしらった気品溢れる柄です。西陣織で奉製しています。

(会員神社卸価格 〇〇〇〇円)



①御朱印帳
②全国一の宮めぐり
③特製巾着袋

編集後記

☆表紙には、令和三年歌会始め(御題「実」)に発表となりました今上陛下御製を掲げました。

☆陛下の祈りと人々の願いは根底で繋がっている事を改めて心に刻み、弛まず修理固成の営みをする事が大御心に叶う神職の務めであると感じるこの頃です。

☆九月五日に予定しておりました琉球国一の宮波上宮に於ける総会は新型コロナウイルス第七波が猛威を振るっており七月中旬に中止の決定となりました。

☆祖国復帰五十周年の節目を迎えた沖縄の地で三年振りに会員一同に会する意義深い総会として開催する運びで翌六日には国立沖縄戦没者墓苑にて英霊に感謝の誠を捧げ我が国の発展を祈り誓う祭典を執行する予定でした。

☆今号では沖縄本土復帰五十年に当たり、沖縄に関する三本の文章を掲載させて頂きました。

☆ご執筆頂きました仲村覚先生、また本誌への転載をお許し下さりました波上宮渡慶次宮司様、大山祇宜様、(株)神社新報社、産経新聞那覇支局皆様にご感謝申し上げます。

☆令和四年度総会開催企画については、波上宮大山祇宜様に実務を熱心にご指導頂きました。

☆残念乍ら我々が沖縄の地を踏むことは今回叶いませんでしたが、祇宜様には自著『沖縄・その剛毅にして純朴なる県民性と敬心・崇祖の土壌』を編輯子に恵与下さいました。

☆そこには沖縄現地で祇宜様が実感された敬神の念篤き人々の姿が鏡の如く描かれており、日頃本土の報道等で聞きする内容とは隔離した、古き良き日本がそこにありました。

☆不勉強であった編輯子には沖縄は時期尚早であったのだと思致しました。この会報が一人でも多くの人の目に触れ、沖縄を考え、我が国を考える切っ掛けになればと思ふ次第です。

☆渋谷申博先生には今号にも玉稿をお寄せ下さり有り難うございました。自然豊かな我が国に於ける神々の鎮座地、伝承、そして信仰の継承について一の宮の果たしている役割を再考した次第。

☆一の宮巡拝会の塩原代表世話人には巡拝活動の原点を記録に留めて下さいましたことは有難く今後も語り継がれることでしょう。

☆茲に『日本国一の宮』第四号をお届けします。

(事務局 高)